



経営ワンポイント情報「不易流行」

by 目加田博史

あ、熱中症

1731人。これは2010年に発生した熱中症による死亡者数で、最高記録です。352人は生産年齢（18歳～65歳未満）で20%に当たり、生産年齢の中でも加齢とともに死亡者数は増加してゆきます。2010年の夏に搬送された熱中症患者数は全国で53,843人。そのうち、生産人口は22,361人で、40%を占めます。最も多いのは65歳以上の高齢者で46%を占めるのですが、日頃注意していると思われる生産人口年齢でも高い数字が出ています。

2010年とそれ以外の年では何が違うのか、明確な関連性がわかっています。2010年の猛暑日（気温35度以上）は56日、熱帯夜（気温25度以上）が13日あり、猛暑日と熱帯夜の日数と死亡者は完全相関しています。死亡者の8割は高齢者が占めますが油断はできません。対策をしっかりとる必要があります。

私たちの子供のころは、熱射病はありましたが、熱中症という概念がなく、なぜ、熱中症が増えてきたのが不思議でした。熱中症の発症原因は、よくご存じのように、高温と高湿度による体温調節がうまくできないことで体調が悪化することです。屋外で日差しを浴びたり、気温の上昇で体温が上がると、体は体温を調節するために、汗として体外に熱を放出します。湿度が低ければ汗は蒸発するときに熱を奪って体温を下げられます。同時に、体内の水分や塩分、ミネラルが失われるので、水分・塩分補給が必要です。一般的に水を飲んで体内に吸収されるまで30分かかるといわれます。汗をかくまえに補給することが前提になります。一気に大量に水を飲んでも、結局は吸収できずに尿として排出されますので、吸収されやすいように、こまめに水分を取ることが最も大切です。遅れば脱水症状がおきて致命傷になりかねません。

また、湿度が高いと汗をかいても蒸発しないため、皮膚の表面をただただ流るだけで、体温調節になりません。熱が体内に残ったままになります。これも体調悪化の原因となり、熱中症のリスクになります。

気象庁がホームページで発表している1883年からの気象データを分析すると、地球温暖化がくっきりと出ています。大阪市の1883年の最高気温は30度前後でしたが、ここ最近では35度前後になっています。ここ130年の間に5度も上昇していることになります。一方、体温は低体温化が進んでいますので、リスクはますます高くなる一方だといえます。

ビジネスの殆どは屋外での活動を元に成り立っています。営業活動しかり、建設現場しかり、農作業しかり、物流業務しかりです。暑い時に動くわけですから、体温は上昇し、熱中症のリスクが上がります。水分や塩分補給が必要なのはわかっていますが、自分だけは大丈夫という過信も邪魔して、いきなり発症する場合も増えてきます。単なる個人の判断と割り切ることもできないくらい状況になっていますので、経営の一環としてとらえることが必要です。

株式会社目加田経営事務所

<http://21cmc.jp>

那覇 〒900-0014

那覇市松尾 1-18-22 8階

TEL098-864-0331

FAX098-860-3416

京都 〒603-8478

京都市北区大宮釈迦谷 4-10

TEL075-334-5105

FAX075-493-8305

好きなもの「えがお」

得意ワザ「見える化」技術

嫌いなもの「現状維持」

2日間の「マルミエ診断」受付中！！

お電話ください。098-864-0331

Email : mec@mekata.co.jp